

## 新島講座についての報告

新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

昨年十月七日(土)東京にて開催いたしました第十回東京新島講座並びに十月十八日(水)、二十一日(土)の二日にわたり、京都・同志社にて開催いたしました第十三回新島講座の講演要旨を記述いたしました。

### 第十回東京新島講座

#### ○パトロン

—イギリス文化を支えた人々—

同志社女子大学教授 小林章夫

○京都「町内」のなりたち

同志社大学人文科学研究所教授 仲村

#### 研

#### (講演要旨)

小林章夫教授の講演はパトロンという今日ではいささか微妙なニュアンスを伴うが、本来は広義の後援者を指す言葉だった。ヨーロッパ中世においては教会や国王、有力貴族が文芸パトロンとなつて文学、芸術、学問の隆盛を支えてきたが、ルネッサンス以降は教会や国に代わつて、大きな権力、財力をもつ貴族、大商人たちがパトロンの役割を果たすようになる。



小林章夫教授

今日では文学作品は出版者を通して一般の読者の前に提供され、文学者たちは作品を売ることによって印税を得て生活しているが、十八世紀以前においては出版業もまだ小規模で、読者の数も少なかったため、いわゆる筆一本で文学者が生計を営むことは難しかった。そこで有力なパトロンに生活の面倒をみてもらつたり、作品を買いあげてもらつたり、あるいは予約出版という形で事前に金を集めたのち本を出版するといったことが、多くおこなわれていたのである。また時の政府を諷刺したような作品を書く

と検閲や発禁の網にかかることがあつたため、有力パトロンの保護は精神的な安心感を与える役割も果たしていた。

つまり、十八世紀後半に至るまでのイギリス文学の歴史は、こうしたパトロンと作家との関係を抜きにしては考えられず、作家はパトロンによって物質的、精神的両面の保護を与えられ、一方パトロンはすぐれた作家や有望な文学者を発掘することで自尊心をくすぐられるという形が存在していたのである。

しかしながら十八世紀後半以降、出版業が盛んとなり、読者数も拡大していくと、これまでのような個人の有力パトロンに作家が頼るといふ形が薄れ、代わって一般読者が作家の文学活動を支える役割を担うようになる。すなわち「大衆パトロン」の出現であり、「文学の大衆化現象」である。十八世紀末、ドクター・ジョンソンはチェスタフィールド伯に絶縁状を送り、パトロンなる存在のわがまま勝手を難したが、この出来事の根底には単なる行き違いがあつた

とはいえ、イギリス文学、文化、社会の流れの中で旧来のパトロン制度が変質を遂げつつあることがはしなくも示唆されている。

パトロンは、文学者や芸術家たちの自由な精神を束縛するものだから排除すべきだという意見が、昔前までは大勢を占めていたが、歴史を冷静にふりかえってみるならば、多少の弊害はあつたにしても、パトロンが文芸の発展に果たした役割は無視することができず、さらに今日では企業や大学がスポンサーとなつて文芸の発展を支えていることも重要な一面として忘れてはならないのである。

続いて仲村研教授の講演は現在、京都市民は旧洛中の東西と南北の通りを「マルタケエビスニオシオイケ」：「テラゴコフヤトミヤナサカタカ」：と一種の口遊みにしている。この口遊みは豊臣秀吉の洛中市街整備以降の街路名を読みこんだものであり、京都市民にとって街路が日常生活に完全に溶け合つたときに、市民の知恵として



仲村 研教授

成立したと考えてよい。このような口遊みは平安時代末期にも、東西路を「一正土土辺、鷹近勘中一、春炊冷二条、押坊姉三条」：「南北路を「朱雀坊美匣、大宮猪堀油、西洞町室鳥、東洞高万富」と漢詩に読みこまれていた。平安時代末期に平安京の住民生活が街路と共にあることを示している。

平安京は当初より右京が低湿地の故に衰えたが、平安京そのものは方四十丈（約百二十メートル）のマチを単位として成立し、マチは縦四行、横八門の三十二戸主（南北五丈、東西十丈）この単位を二戸主へへぬ

し」といふに)に細分された。マチは東西の方向にのみ門戸を開くことが許された二面町であったが、都城制の解体とともに東西南北の四つの方向に門戸を開く四面町に変化し、平安末期には方四十丈の四つの頰が分立し、マチが四つのチョウをもつ四丁町へと移行する。この四丁町の成立過程で漢詩の街路名口遊びが出現するのであり、街路がマチを区画する役割から都市の生活に血管の役割を果たすものへと変化する。

マチから分立したチョウが街路を挟む向側のチョウと一体となり、両側町という現在の町内の原型が誕生する。その時期は十三世紀末から十四世紀前半ではないかと推定される。チョウは発展過程で、同時代の近畿地方の村の惣(自治的村落)と同じく、チョウの共有財産として家屋やチョウ出入の門、井戸、便所、宗教施設、祭具、調度品、米穀、金銭などをもち、チョウの構成員は烏帽子着、老成(おとななり)、入道成などの通過儀礼や年中行事を共にした。そしてチョウの自治を象徴する町内の掟を制

定した。このようなチョウは、十五世紀初頭には室町幕府の京都支配の単位となっており、チョウの住民を「ちやう人」として、これに防犯の連帯責任を負わせている。

政治都市ミヤコから経済都市チョウへの移行は、崩壊と再開発とを表わす巷所(こうしよ)と辻子(づし)の出現に象徴されるが、その中で形成されるチョウの構成員は山科言繼の日記の用語などからチョウニン、チョウシユウと呼称すべきであり、都市民全体を村人や浦人に対してマチシユウといえても、チョウの構成員でチョウの自治の担い手はチョウシユウという歴史用語を使用するのが、史料に則した語法と考えている。

京都の町名の地点表示法は、南北路と東西路との交点から上ル・下ル、東入ル・西入ルを無原則に表示するのではなく、上ル・下ルは東西路を、東入ル・西入ルは南北路を基軸にしている。またチョウがどの東西路から上ルか、下ルかを選択し、どの南北路から東入ルかを選択するのは、その

チョウの歴史の中でおこなわれたものであり、現在、私たちが恣意的に指示すべき性格のものではない。チョウの成立には地点表示法をとりあげただけでも、簡単に割り切れない複雑な面をもっている。

### 第十三回新島講座

講師 ハーヴァード大学名誉教授

ジェローム・H・バックリー博士

#### ○第一回講演会

テーマ・十九世紀の自叙伝―ニューマン、ミル、新島、内村

十月十八日(水)午後一時

於、同志社大学神学館チャペル

#### ○第二回講演会

テーマ・テニスとホプキンスの詩における神と自然

十月二十一日(土)午後二時

於、同志社大学神学館チャペル

#### (第一回目講演要旨)

バックリー博士は新島講座に招かれたはじめての英文学者であり、また新島先生を



ジェローム・H・バックリー博士

講演の中で論じたはじめての講師であった。ハーヴァード大学から迎える講師としては第二回のリチャード・R・ニーバー教授に次いで、二人目である。博士は英文学者としては、ヴィクトリア朝の文学と精神史の面ですぐれた業績をあげてきた人である。

第一回目の講演は「十九世紀の自叙伝——ニューマン、ミル、新島、内村」という表題のもとに行なわれた。博士は自叙伝を「すでに成熟している書き手が、自分自身の過去の決定的な選択や決断をふり返りなが

ら、心理的な均衡を確立するために、子供の時期から成年期に至る発展過程を叙述したものと定義した上で、四人の自伝的文书には共通のパターンが見られることを指摘した。それはカーライルの「衣服哲学」の中に明示されている「永遠の否」↓「無関心の中心」↓「永遠の然り」という三段階であり、これはヘーゲルの弁証法の三段階に呼応する。

この四人はその信念、気質において非常に異っているが、共通点は四人とも、孤独を経験したことである。彼らは精神的にその社会からの亡命者であり、自分の時代の慣習や道徳に対して深刻に批判的であり、特に物質中心主義、拝金主義に対してはげしく抗議している。四人はそれぞれプロジストとして自伝を書いた。新島は彼のスポンサーとなったハーディー氏に対して、なぜ日本を脱出してアメリカにまで来なくてはならなかつ

たかを説明する必要に迫られていた。同時に彼は自分の両親や君主への叛逆を、つまり自分の不孝と不忠を正当化する必要があった。地上の親よりも天の父の方により高度の義務をもつという自覚は、このようにして、必然的な帰結だったことがわかるのである。

四人の自伝に共通して目立つのは旅のイメージである。旅は人生のシンボルである。新島がフィリッップス高校に落着いた時にささげた感謝の祈りがそれをよく示している。「光よ、あなたは暗黒の中から私を選び、愛する両親を捨てた私をここに導いて下さいました。その間大風にも風にも会うことなく、常に良風を送って安全に無限の大洋を通過させて下さいました。」四人はいずれも内部志向型の人で、しかも知的な傲慢や霊的な自己満足におちいることがなかった。

なお十月二十日に新島会館において、バックリー博士を囲む非公開のセミナーが行われ、熱心な学生たちから第一回講座の内

容について突っ込んだ質問が出された。質疑は主として自叙伝対伝記、自伝における真实性の問題、英米人の自伝対日本人の自伝、自叙伝対フィクションの諸問題に集中したが、博士はこれらの諸問題に丁寧かつ懇切に答えて、聴衆によい学問的刺激を与えられた。出席者は三十名であった。

(第二回目講演要旨)

二十一日の二回目は、「テニスンとホプキンスの詩における神と自然」と題して、講演が行われ、バックリー博士は

日本文化と西洋文化を比較してみる時、最も大きな違いはそれぞれの自然観にあらわれているように思えます。日本の様々な芸術においては、自然の風景というものが重要な役割を果たしてきたようですが、十八世紀後半から十九世紀前半のロマン主義に至るまで、西洋芸術の中では、自然の風景が中心的な主題として取り上げられることはありませんでした。

ところが、十八世紀後半に、西洋の感受

性に大きな変化が起きました。たとえば、それまでは単に醜い邪魔物程度にしか考えられていなかった大きな山が、その壮大さゆえに、人々の感嘆の念を引き起こすようになったのです。いわゆる「崇高」の感覚です。自然の美や壮大の背後に、創造主としての神を想定する点がこの「崇高」という概念を特徴づけています。

このようなロマン主義的自然観は、十九世紀中期から後期のヴィクトリア朝期にまで引き継がれています。ただし、近代自然科学の勃興に伴い、問題はさらに複雑になっています。これから、アルフレッド・テニスンとジェラード・マンリー・ホプキンスというヴィクトリア朝を代表する二人の詩人の代表作に表現された神と自然について考えてみたいと思います。

ホプキンスの「まだらの美」という華麗な作品は、空、魚、鳥、風景の目もくらむような色彩のカタログです。この世界の際限のない多様性は、神によって「生み出された」ものであることを詩人は歌いあげて

いるのです。この作品は、自然の中にひとり立ち尽くす詩人の創造主への祈りだと言えるでしょう。

「収穫の喜び」という作品は、自然に対する歓喜を描写しています。前半分で、自然の美の背後にキリストの存在があることを詩人は示唆します。そして、キリストは詩人がその場所を訪れる前からそこに存在していたのですが、詩人がそれを見たからこそキリストは認識された、ということが後半部で語られます。

このような理想的な関係は見失われがちです。現代人と神との乖離をいかに克服するかということが「神の壮麗さ」というソネットの主題です。真の生命力を失ってしまった人間の姿が前半部で描かれます。しかし、たとえ見失われても、自然の中に神は聖霊として遍在していることが後半部で確認されるのです。ホプキンスの作品は、このように、自然に対する確信に満ち溢れています。

テニスンにはホプキンスのような自然に

対する揺るがぬ確信は見られません。彼は自然美の崇拜者であると同時に、ヴィクトリア朝科学精神を持った懐疑詩人でもあったのです。

友人の死を悼む代表作『イン・メモリアム』の中で、テニスは世界を荒涼とした意味のないものとして提示しています。宇宙は無原則に運行し、揺るがぬものとされ

ていた壮大な山もむごたらしく侵食されていきます。世界は容赦のない自然淘汰の舞台にすぎません。種の普遍性の否定は、当然、信仰の基盤たる人間の主体性という概念を無残に切り崩し、詩人には「神と自然との反目」しか見えなくなるのです。世界に対する信頼感を回復するために、詩人に残された唯一の基盤は「私は感じて

いる」という事実だけなのです。テニスの作品の中の自然は、神の存在を証明もしません。ただし、自然は個人が自分の理想を表明するための隠喩を不断に提供してくれるものとしてとらえられています。この点で、テニスの自然観は、二十世紀後半の私たちにも通じるところがあるのです。

## 『創設期の同志社』

— 卒業生たちの回想録 —

(同志社社史資料室 一九八六年十二月)

学生のなかにもたまには、初期の同志社のことを知りたいと言ってくる者がいる。また、学生生徒を対象にして、初期の同志社の話をすることもある。そういうとき、文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

四四〇ページにおよぶ本だから、尻込みする者もいるけれども、全部読みなさいと言っているんじゃない、と言っている。収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名。これらのうち、関心がある人の項目から読めばいいのである。

勤める理由は、読みやすくて、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざつくばらんにな学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものである。

彼らはいと楽しいに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。

面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

(頒価一五〇〇円、同志社収益事業課扱い)